

学 位 論 文 要 旨

氏 名 下中村 武

題 目 高校における聴覚障害のある生徒への授業参加のための配慮のあり方に関する研究

本研究では、高校における聴覚障害のある生徒への授業参加のための配慮のあり方を検討し、それについて提示することを目的として、複数の視点から調査を行った。本研究は以下の5章から構成された。

第1章では、通常の学級における聴覚障害のある生徒への授業参加のための配慮と支援に関する先行研究及び実践事例を整理し、それらの問題点を指摘し、それらの問題点を解決するための具体的な解決策を提示した。すなわち、これまでの先行研究及び実践事例では、①聴覚障害のある児童生徒のニーズの詳細が不明確であること、②授業担当教員による配慮の状況の詳細が不明確であること、③教員による配慮が生徒のニーズに合っているかどうか不明確であること、④授業担当教員による配慮の状況と校内体制の状況の区別が不明確であること、⑤教員による配慮が校内体制と関連しているかどうか不明確であることが問題点であった。そのため、その解決策として、①聴覚障害のある生徒自身を対象とする調査、②授業担当教員を対象とする調査、③特別支援教育コーディネーター担当教員を対象とする調査、④教員による配慮と生徒のニーズとの関連の検討、⑤教員による配慮の状況と校内体制の状況の関連の検討を提示した。

第2章では、高校で学ぶ聴覚障害のある生徒を対象としたインタビュー調査を行い、聴覚障害のある生徒のニーズの詳細について明らかにした。すなわち、教員の話し方に関する配慮については、①話す速さが適切であること、②声の大きさが適切であること、③聞き取りやすい話し方であること、④口形が読み取りやすい話し方であることの4つの内容がある一方で、授業環境に関する配慮については、聴覚障害のある生徒のニーズが明確には明らかにできなかった。加えて、聴覚障害の程度が重度の生徒についてのみ、「口形の読み取りやすさ」に関する配慮のニーズがある一方で、コミュニケーション手段によって、配慮に関するニーズが異なるかは明らかにならなかった。

第3章では、高校で学ぶ聴覚障害のある生徒の授業担当教員を対象とした質問紙調査を行い、授業担当教員による配慮の状況及び経験と配慮の関連について明らかにした。すなわち、授業担当教員による配慮の状況のうち、話し方に関する配慮については、「生徒たちの顔を見て話すこと」など、ほとんどの教員が配慮をしている一方で、「口の動かし方」など、比較的配慮をしていない教員が多いこと、授業環境に関する配慮については、「対象生徒が授業を理解しているか注意を向けること」以外は、全体的に配慮をしている教員が少ないことを明らかにした。加えて、授業担当教員の経験と配慮の関連のうち、聴覚障害のある生徒の教育経験があることは、聴覚障害のある生徒への配慮につながっていない可能性がある一方で、聴覚障害以外の障害のある生徒の教育経験や、障害や特別支援教育に関する研修の受講経験は、聴覚障害のある生徒への配慮につながっている可能性があることを明らかにした。

第4章では、聴覚障害のある生徒が在籍している高校の特別支援教育コーディネーター担当教員を対象とした質問紙調査を行い、聴覚障害のある生徒への配慮に関する校内体制の状況及び授業担当教員による配慮の状況と校内体制の状況の関連について明らかにした。すなわち、聴覚障害のある生徒への校内体制の状況のうち、話し方に関する配慮と授業環境に関する配慮のいずれについても、全体的に校内体制が整備されていないことを明らかにした。

第5章では、各章のまとめと配慮のあり方、本研究の学問分野への貢献、今後の課題について述べた。高校における聴覚障害のある生徒への授業参加のための配慮のあり方としては、聴覚障害のある生徒から授業担当教員に配慮を要求し、それを授業担当教員で共有し、校内体制を整備していくことが重要であることであることを指摘した。すなわち、高校においては、聴覚障害のある生徒への配慮が授業担当教員に委ねられている可能性があること、その授業担当教員による配慮は聴覚障害のある生徒のニーズに合っていない可能性があること、そのため、聴覚障害のある生徒から授業担当教員にニーズを伝えることが重要であることが導かれた。しかし、聴覚障害のある生徒がニーズを自覚していない場合は、保護者から教員にニーズを伝えたり、生徒の障害認識を深化させたりすることが必要であることも考えられた。その後は、授業担当教員による配慮の方法の共有と配慮に関する校内体制を構築することの必要性について述べた。

また、本研究の学問分野への貢献としては、聴覚障害のある生徒のニーズの詳細といった新たな知見や、複数の視点から調査の実施といったオリジナリティ、授業担当教員が配慮をする際の指針になるといった教育実践への貢献について述べた。そして、今後の課題としては、同一高校内で検討するといった研究全体から生じる課題と、聴覚障害のある生徒のニーズの検証といった各研究から生じる課題について述べた。